

聖書：使徒 15：22～35

説教題：聖霊と私たちは

日時：2014年3月2日

人はどうしたら救われるのか、イエス・キリストの身代わりを信じるだけで良いのか、それとも律法が命じる行ないをすることも必要なのか。この大問題についての教会会議がエルサレムで開かれました。異邦人宣教が進むにつれて、エルサレム教会とアンテオケ教会の間には微妙な緊張感が生じるようになっていました。それまで教会の主体であったユダヤ人からすれば、異邦人が信仰に入るのは良いが、割礼も受けず、律法の規定も守らないようであって良いのだろうか、という疑問が生まれてきたのも理解できます。そこであるユダヤ人たちは異邦人の地に出かけて行って、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。」と教え始めました。その結果、異邦人の教会では大きな混乱が生じたのです。そこで正しい教理を確認するために、アンテオケ教会からパウロとバルナバと幾人かが遣わされて、エルサレムの使徒たちや長老たちと話し合う会議が開かれたのです。

その会議が確認したことは、人は律法を守ることによって救われるのではなく、ただイエス・キリストの恵みによって救われるということです。キリストは私たちの救いに必要なすべてのことを成し遂げてくださったのであって、人はただこの方を信じる信仰を通して罪を赦され、天国の民の一員とされるということです。この喜ばしい会議の決定事項が異邦人教会に告げられて行くのが今日の箇所です。

まず見て行きたいのは、この報告がなされた仕方についてです。アンテオケ教会にこのことを伝える際、パウロとバルナバに公式の手紙を持ち返ってもらうだけでも事は済んだかもしれませんが、しかしそこにエルサレムの代表者が伴ったならもっと良いでしょう。その働きを任されたのはバルサバと呼ばれるユダとシラスの二人。22節に彼らは兄弟たちの指導者、また32節には預言者と記されています。このような教える賜物が与えられている二人をエルサレム教会はあえて選んで遣わしたのです。それは彼らに是非、アンテオケのクリスチャンをみことばをもって励まして欲しいと願ったからでしょう。

また彼らが持たされた手紙には異邦人クリスチャンたちに対する温かい心遣いが満ち溢れていました。23節：「彼らはこの人たちに託して、こう書き送った。『兄弟である使徒および長老たちは、アンテオケ、シリア、キリキヤにいる異邦人の兄弟たちに、あいさつをいたします。』」ここにこの手紙が「誰」から「誰」への手紙なのかが記されていますが、エッセンスを抜き書きするとどうなるのでしょうか。それは「兄弟から兄弟へ」となります。つまりここには割礼を受けているユダヤ人クリスチャンと割礼を受けていない異邦人クリスチャンとが同等の立場にあることが述べられているのです。異邦人はユダヤ人に帰化していないために、一段低いクリスチャンではないのです。立派な神の民の一員として迎えられているのです。この出だしからすでに、彼らが最も聞きたいと願っていた知らせが十分に記されていたのです。

24節にはエルサレム会議が開かれるに至った背景が短く説明されています。「私たちの中のある者たちが、私たちからは何も指示を受けていないのに、いろいろなことを言ってあなたがたを動揺させ、あなたがたの心を乱したことを聞きました。」ここに異邦人教会を巡り歩いて、これこそエルサレム本部の教えだと騒ぎまくった人々が、実は何の権限も与えられていなかった

た人々だと言われています。そのことが公に語られています。

そして公式文書を託す四人のことが 25～27 節に触れています。アンテオケ教会のパウロとバルナバ、エルサレム教会のユダとシラスです。ここでパウロとバルナバには非常に好意的かつ友情あふれる言葉があげられています。これもアンテオケ教会に対するエルサレム教会の「心」を現わしているでしょう。なぜなら今回のことは、特にパウロとバルナバの立場が疑問視されたという出来事とも言えるからです。この二人の先生がエルサレムからどのような評価を受けているかは、アンテオケ教会が少なからず気に掛けていたことだったでしょう。そんなところへ「私たちの愛するバルナバとパウロ」と記してあったのです。続くところにも、エルサレム教会がこの二人を心から尊敬し、支持していることが十分に示されていたのです。

そしてエルサレム会議の決議事項が記されます。28～29 節：「聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかに、あなたがたにその上、どんな重荷も負わせないことを決めました。すなわち、偶像に供えた物と、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けることです。これらのことを注意深く避けていれば、それで結構です。以上。」 ここには二つのことが述べられています。一つは、異邦人にはあることを除いてどんな重荷も負わせないということ。すなわち救いのためにはただイエス・キリストへの信仰だけで十分であるということです。しかし会議はもう一つのことでも決めました。それは偶像に供えた物と、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けるように、ということです。これはどういうことでしょうか。会議は救いのためにはキリストのわざだけで十分であり、それに何もつけ加えるべきではないと言いました。なのになぜここでこれらのものを付け加えているのでしょうか。割礼を受けなくても良いことは分かりましたが、別の要求をつけたら結局同じことになるのではないのでしょうか。

この四つのことはいずれもユダヤ人が忌み嫌うものであり、異邦人世界では平然と行われていたものでした。一つ目の「偶像に供えた物」とは、異教の神々にささげたお下がりを食べることです。異邦人世界では、偶像にささげられた肉が当たり前のようにして普通の市場で売られていました。パウロがある箇所で述べているように、それを市場の製品として買って食べることはキリスト教では何の問題もありません。しかしユダヤ人にとって、それはとても受け入れられないことでした。二つ目の「血」と三つ目の「絞め殺した物」は、血そのもの、あるいは血が抜かれていない肉などを指すのでしょう。レビ記 17 章では、血は命の象徴であり、それをそのまま食べることは禁じられていました。ですから血のついたままの何かを食するという行為は、これまたユダヤ人には受け入れられないことでした。四つ目の不品行とは何でしょうか。これは異邦人世界ではユダヤ人世界と比べられないほど性的乱れがあったことと関係するのかもしれませんが。あるいはある学者たちは、レビ記 18 章で禁じられている近親婚のことではないかと言います。

これらは救いを得る条件として必要なことかと言えば、会議が確認したように、そうではありません。しかしだからと言って、これらに無頓着なら別の問題が生じて来ます。特に先の三つは食事に関わる問題です。ユダヤ人と異邦人が一緒にテーブルで交わりをしている時、これらの食べ物が出てきたらどうなるのでしょうか。異邦人は平気で食べるでしょうが、ユダヤ人はそれを見てつまずいてしまいます。これまで何百年、何千年とそういった伝統の中で生活して来た人たちの中には、生理的にそれが受け入れられない人がいてもおかしくありません。そんな時にもし異邦人クリスチャンが、「あなたがたはなぜこの肉を食べないのか。私たちはただ

信仰によってきよい者とされているのであって、これらを食べないことによるのではないはずではないか。」と正論を振りかざすなら、ユダヤ人クリスチャンたちは、そのテーブルから離れて行くでしょう。いやキリスト教信仰からも離れてしまうかもしれません。そうするよりもユダヤ人と交わる時には、それらを食べず、避けておく方がどれだけ賢明でしょうか。

「すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが有益とはかぎりません。すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高めるとは限りません。」(I コリント 10:23) クリスチャンは主にあって何をしてもよいのです。しかし自分にとって良いことでも、周りの人々をつまづかせたり、徳を建てないことなら、その人は自分の自由を愛によって自発的に制限するようにと勧められています。言い換えれば、私たちは自分の信仰生活だけを考えていけば良いのではなく、他の人のことも顧みることが大事であるということです。別に偶像のお下がりの肉を食べなくても信仰に違反しません。血が付いている生の肉を食べなくても死にません。大切なことは、自分は何をして良いかという観点からではなく、それは他人の徳を建てるか、周りの人々に益するかという観点から自らの行動を考え、律し、与えられている自由を用いて行くということです。

これは救いのためにただキリストにより頼む信仰と矛盾しないばかりか、かえってよく一致することです。私たちはイエス様のみわざに心から感謝します。そこに私たちが見るのは、イエス様の愛のお姿です。キリストは神であられる方なのに、ご自身のあり方を捨てられないとは考えずに、ご自分を卑しくし、実に十字架の死にまでもへりくだってくださいました。その主に心から感謝するなら、どうして私たちは他の人にも同じようにしようと思わないのでしょうか。主の救いを本当に感謝するなら、主がしてくださったように、自らも他の人のために、必要なら喜んで自らの権利を放棄し、相手の益に仕える愛の歩みへと導かれるべきではないでしょうか。

エルサレム会議はこのように二つの点で勝利を得ました。一つは福音の真理を守ることにあって。もう一つは他の兄弟姉妹たちを思いやる愛の実践において。ルターはこのような態度を「信仰においては強く、愛においては柔らかく」と表現しました。また別の人は「本質的なことにおいては鉄の柱のようで、本質的でないことにおいては揺れる葦のようで」と言いました。このバランスがエルサレム会議の決議事項には見事に示されていると言えます。

この素晴らしい決議がどのようにして導かれたかにも注目したいと思います。28 節に「聖霊と私たちは」とあります。前回も触れましたように、この会議は人間が主なのではありません。彼らは聖霊こそ会議の主であることを認めて、この会議を行ないました。聖霊の一番の働きはイエス・キリストを私たちに示すことです。彼らは主の御心を御言葉を通して尋ね求める中で、聖霊の導きを頂いたのです。聖霊はイエス・キリストの素晴らしさを彼らに益々見させ、そこから生まれる愛の実践へと導いたのです。私たちもこのエルサレム会議に見られるバランスある祝福に歩むためには、聖霊に導いていただく必要があるということを示しています。

さて会議の報告は異邦人クリスチャンたちにどう受け止められたのでしょうか。30 節以降から分かることは、異邦人クリスチャンたちは大いに励まされ、喜んだということです。彼らは救いのためにはただキリストへの信仰だけで十分であるという決議を聞いて大いに慰められたのです。またこの手紙の文面に現わされたユダヤ人クリスチャンたちの心温まる態度にも励

まされたのでしょうか。その上、手紙を持って来てくれたエルサレム教会のユダとシラスが、多くのことばをもって力づけてくれました。そうしてしばらくの時を過ごした後、二人の使節はエルサレム教会へ帰り、パウロとバルナバはアンテオケにとどまって、主の御言葉を教え、宣べ伝え続けたのです。

私たちは「真理においては堅く、愛においては柔らかく」歩んでいるのでしょうか。ともすると私たちはあまり大事でないことにムキになって自己主張して争いを引き起こし、反対に信仰の本質的な部分においては甘くなってしまう。「信仰において柔らかく、愛においては厳しく」と。そんな私たちに必要なことは、聖霊に導いていただくことでしょうか。御言葉を通してキリストをより良く見せていただき、キリストへの感謝から、キリストに倣う歩みへ進むことです。ペンテコステ以来、教会に住まわれている聖霊は、このようにして教会を守り、会議を祝福し、そこに連なる兄弟姉妹を励ましと喜びに満たしていただきました。今日も聖霊は教会とともにいて、そのように導いてくださいます。私たちはこの聖霊に信頼し、教会会議において聖霊の導きを求め、また一人一人がこの聖霊の導きを祈り求めて、主の恵みと愛に豊かに生かされ、主を宣べ伝える教会の歩みへ進みたいと思います。